

令和5年度 第2回高知県スポーツ振興県民会議 議事要旨

日時：令和5年11月2日（木）13：30～15：20

場所：城西館 3階 日輪の間

出席：委員24名中17名出席

出席委員：青木委員、井奥委員、中平委員

大坪委員、尾下委員、刈谷委員、川上委員、生島委員、田井委員、竹島委員

常行委員、寺村委員、戸梶委員、瀨田委員、藤田委員、前田委員、矢野委員

専門的知見を有する者：遠藤裕幸、溝渕孝、横山幾夫、須賀昌彦

議事：

(1) 令和5年度スポーツ施策の進捗状況について

(2) 令和6度の強化ポイント（案）について

1 開会

知事挨拶

○委員の皆様にお集まりいただき、また、日頃より本県のスポーツ振興にご協力をいただき感謝。本県のスポーツの状況としては、国内外で本県出身の選手が活躍し、誠に喜ばしいことと感じる。国際大会では、桜井つぐみ選手が世界選手権で3連覇をし、来年フランスのパリで行われるオリンピックへの出場が内定。パラスポーツでも杭州アジア大会で銅メダルを獲得したパラカヌーの小松沙季選手をはじめ、パラクライミング、車いすラグビーなどでの活躍がみられる。国内では、鹿児島特別国民体育大会でサッカー成年男子が初優勝という快挙を成し遂げた。こうした選手の活躍が、県民に夢と希望を与えている。県内では四万十ウルトラマラソン、須崎ウォータースイミングなど全国から愛好者が来県するイベントが開催され、地域経済の活性化に寄与している。また、本県選手の活躍やスポーツ活動による地域スポーツの活発化などによる盛り上がりも、本県全体の活性化、県民の意識高揚につながっていると考えている。

本日の会議では上半期の進捗状況を踏まえ、1回目の会議でお話しした来年度の方向性を示したが、より内容を具体化した強化ポイントについて議論いただきたい。具体的には、指導者の発掘・育成、選手・指導者のキャリア支援など。本県のスポーツ振興に向け、着実に進めていきたい。活発な議論をお願いしたい。

青木会長挨拶

○知事の話にもあったが、本県出身の選手の活躍が多く見られる。国体が鹿児島で開催され、サッカー成年男子の優勝。接戦から最後の底力をどれだけ見せるかが勝利のカギになる。陸上女子の走り幅跳びで恒石選手が優勝、カヌーでは渡辺選手が優勝等、様々な種目で将来に向けて活躍の芽が出ている。この結果は、様々な競技団体や、委員の皆様のご意見の賜物。また、選手を支える指導者やスタッフの熱い思い、大会のボランティアや地域の方々の温かなおもてなし等いろいろな要素がスポーツには関連がある。そういう意味では本県においてもさらなる盛

り上がりに向けて意見を出し合い、特に「3つの柱」にどう関連できるかが重要。

○また、デジタル化もスポーツに大きく影響していて、オンラインで全国に情報発信し、スポーツの習得が可能になる。地域に指導者がいなくてもできる。それを補完するものとして競技団体の専門家が地域を巡回する。という取り組み方もできる時代。むしろこれからは地域のスポーツが輝くようにしていかなければならないと思う。本日は、会の運営・進行にご協力をお願いする。

2 議事

令和5年度スポーツ施策の進捗状況について

議題1【事務局説明】

(矢野委員)

先日の競技力向上部会で出た意見と関連させながらお話しさせていただく。

○指導者の育成については、まだまだ子どもたちへの暴言やハラスメントによって子どもたちが競技を辞めてしまうという状況が見られる。一方で部活動の地域移行、地域連携をするという課題を抱える上でスポーツ指導者の育成、適切な指導方法の教示に尽力すべきである。

○次に、障害者スポーツの強化を考える上では、障害者スポーツコーディネーターという存在が重要になる。障害者スポーツコーディネーターが各競技団体等と連携して専門的な競技力向上を図れる関係づくりを進めてほしい。

○また、国体の順位の上昇や国際的に活躍する選手の増加などからわかるように、本県の行ってきた取組が少しずつ実績になってきている。レスリングの桜井つぐみ選手に関しては、県がサポートする枠組みの中でメンタルトレーニング等を続けてきて、現在の業績に繋がっている。

○そのほか、現在データの収集、分析が必要になってきており、高知県スポーツ科学センター（以下「SSC」という。）の利用はこれからさらに増えていくと考えられる。バレーボールを例に挙げると、相手の選手がどこにスパイクを打ってくるのかなど多数のデータを試合中に分析し活用している。従来の経験による情報にプラスしてデータ分析が重要なものとなる。

○くろしおキッズを卒業した子がその後どのようなキャリアをたどり、どのように本県に還元しているのかという追跡調査をする必要があるのではないかという意見が出た。

(前田委員)

地域スポーツ推進部会で出た意見と関連させてお話しさせていただく。

○スポーツ参加の拡大については、部活動の地域移行などは市町村の地域状況に応じて進めていく必要がある。子どものスポーツ環境づくりについても保護者の理解が必要であり、市町村と連携し、市民、町民に政策の意図が伝わるようにしてほしいという意見が出た。

○また、教育委員会で「地域みらい留学」という県内外から子どもを受け入れる体制をとっているという例も挙げられ、人口が減っている状況ではあるものの、高知県の中で今ある資源を最大限活用してほしいという意見も出た。

○パラスポーツに関しては、車いすラグビーの池選手など国際大会で優秀な成績をおさめる高

知県の選手もいるので、その様な選手を次にどのように繋げていくのかという議論を行った。その中で非常に特徴的であると感じたことは、車椅子に乗られている方が、合宿等を行い、高知県の魅力を情報発信することで、障害のある方でも訪れやすい地域であるということがアピールできるのではないかという意見も出た。

○また、ツーリズムの観点として「スポる KOCHI」については、非常に面白い内容になっているので多くの方の目に触れるように情報発信に努めたら良いのではという意見も出た。また、入込客数という数だけでなく、スポーツがその地域にどのような効果をもたらしているのかや、地域として情報発信力がどれだけ上がったのかなどについても伝えてほしいとの声もあった。そのほかにも、歩きお遍路や武道ツーリズムなど多様な議論が行われた。全体を通じて、改めてスポーツには様々な視点が必要であると感じたので、部署間での連携や状況把握を行い政策を進めていくべきである。

来年度の強化ポイントについて

議題2【事務局説明】

(寺村委員)

○スポーツに出会うとして、地域でどのように視野を広げていくかが一番の課題と考えている。各市町村で出生率が低下しており、ひとつの市町村単独でイベントを実施するのは困難。特に中山間部では複数の市町村が合同でイベントを実施し、異なる市町村の子ども達が出会う場を設けることでコミュニケーションがとれる場ができれば、子ども達同士の関係性も作りやすいのではないかと思う。

○スポーツ参加の拡大で大学生の活用について説明があったが、大学生自身に活動意欲があっても、例えば審判員として活動するにあたっての資格更新費用は高額であり、継続して費用を捻出するのが困難。また、交通費も支払われずほぼボランティアの状態で、高知の場合は競技場が遠隔地に点在しているので、交通の便の確保が困難という課題について学生が議論していた。また、指導者の養成にあたっては、審判員の経験値を積むことで競技への知識を深めることも必要。例えば補助金を出すとピンポイントで学生を指導者として養成することも考えられる。そのような大学生が地域に出て行ければ、地域の指導者に習って活動する子どもたちにより「楽しさ」を体感してもらえないのではないかと思う。安心して子どもたちが参画できるような地域づくりやスポーツ推進に取り組んでいただければと思う。

(事務局)

○出会う場の工夫ということについては、市町村への取組の支援に併せて、広域で考えていく必要がある、現在行っているブロック毎の会議などで具体的なものを検討していく予定。また、大学生の審判等の協力については、すべての競技で審判への補助というのとはかなりの規模になり難しいのかもしれないが、まずは大学生や競技団体の意見を伺ってみたい。

(藤田委員)

○子どものスポーツ環境づくりにおいて、高等学校の分野で中山間地域の学校ではスポーツに出会う機会が少ないと感じた。強化ポイントの2ではインクルーシブなスポーツ活動の推進において、先日盲学校の生徒とファイティングドックスの交流事業がニュースであった。学校が独自に活動を積極的にして、こういった活動を年間を通して計画的に行えば可能性は広がると思う。

(事務局)

○インクルーシブな活動については、今後非常に重要な項目。障害のある方がスポーツを通じて社会参加することにつながってくるので、既存のスポーツの中でルールを工夫したものがたくさん出てきており、学校間での交流にも活用できる。学校の方にも協力いただき勉強させていただきたい。

(濱田委員)

○子どものスポーツ環境づくりにおいて、トップ指導者による招へい時に留意した方がよい点がある。以前、生徒を連れてトップアスリートの講演を聞きに行った時の話。その選手が自分の経歴を説明されたときに、「大学入試は勉強しなくても入れる」とか「普段から勉強は全然しない」等の話をされて、中学生もそこにはいたので、自分はショックを受けた。トップアスリートというのは影響力があるので、子どもたちは話を鵜呑みにしてしまう。招へいする前に、その選手が普段講演で話している内容を調べたうえで判断すべき。

(事務局)

○トップアスリートの招へいについては、今後十分意識をしてを対応を進めていく。

(常行委員)

○先ほどの濱田委員の話にもあり、指導者の育成が話題になっているが、高知工科大や大阪体育大等、全国的に「UNIVAS (ユニバス)」という組織団体ができており、大学生が人間力を高めながら、単位を落とさず、暴言や体罰をしないことを守りながら指導を推進できるように中堅もしくは大規模な大学の組織体が教育の機会を提供しているので、そういうところと情報の共有ができればいいと考えている。

(事務局)

○県内の大学はもちろんであるが、大学との連携・協力というのは非常に今後も重要だと捉えているので、しっかりアンテナを張り、ネットワークを広げながら県内のスポーツ振興の取組につなげていきたい。

(田井委員)

○今度の強化ポイントの中で市町村が行う取組の支援というところで、市町村の中でもすごく温度差があり、行政に話をしてもそれを取組としてやっていこうという市町村がどれぐらいあるかなと思ったので、ぜひ、その市町村の方にもっとアプローチしていただきたい。

○現場で最近私がよく耳にするのが、指導者の問題もあるが、保護者の問題が大きい。保護者同士がいがみ合い、子供がやめていくパターンが多い。特にスポーツ少年団の子ども達は、それが多い印象にある。なので、ぜひ県の方でも1回リサーチしてもらえたらいいと思う。

(事務局)

○各市町村が様々な課題を抱えている中で、各地域の子ども達や保護者のニーズを市町村毎に情報を取りまとめ提供することで、地元の課題を感じてもらい、具体的な対策につなげていきたい。県としても後押しをしていく。

○また、保護者の意識としては、子どもは楽しくスポーツをする、スポーツは楽しいものだと感じてもらう取組も今後必要。競技団体の状況も聞かせていただき対応していきたい。

(横山幾夫氏)

○広域での取組では近隣市町村の情報が入ってこない。情報提供をお願いしたい。安芸市は、少子化が進み出生率は10~20年前の半分以下になっている。よって、子どものスポーツに関しては競技数が非常に減っている。安芸市内に希望の競技がないので住所を別の市に移して活動しているパターンもある。県下でそのような情報があれば教えていただきたい。

(事務局)

○広域スポーツハブ促進委員会を行っており、複数の市町村がブロック毎に情報共有している。

○また、各市町村にも協力いただいて、特に小学生と中学生が活動できる競技がどういう状況なのか整理しているものがあり、ブロック内で近隣市町村でどういった競技があるのかわからないかを情報共有している。広域で連携していくという対応は今後も重要で県も市町村と一緒に進めていきたい。

(溝淵孝氏)

○インバウンド向けのスポーツツーリズムに力を入れることについて、協力していきたいと考えている。ただ、各町村には強み弱みがあり、整っている施設もそれぞれ違いがある。資料にはない分野でも、クライミングやゴルフなどが強みの町村もあるため、それをいかした形で県の施策に協力したい。例えば、県として、どのようなスケジュールで各市町村に落とししていくのかについて分かる範囲で教えて欲しい。

(事務局)

○今年度から市町村を対象に、地域の特色を生かしたスポーツツーリズムの取組の勉強会を開催している。その中で、インバウンドを今後どのように取り組んでいくのかについて事業戦略を作っていくようにしている。

(川上委員)

○主に SSC のデジタル機器のさらなる活用について。SSC のサイトをみてきたが、文章だらけで、どのような機器があるか、どう使用するかなどが分かりづらく、魅力的なサイトではない。行ってみようという気持ちが起こりづらいのではないかと感じる。

○SSC ができて数年経つ。参加団体が増え、成果も出ているが、一度これまでのデータを評価することが大事。大学生でスポーツに関わりたい人が多い。SSC 職員も忙しいのでそういう学生に研究の一環として手伝ってもらってはどうか。SSC の人員増加も必要。

(事務局)

○SSC の管理運営につきましては、高知県スポーツ振興財団の方で精力的に取り組んでいただいているところ。着実に利用者も伸びてきている。サイトの見やすさについては、財団と相談する。

○データについては、令和元年度に立ち上げてから、実績としては積みあがっているのので、データの整理・分析に踏み込んで対応していきたい。

(大坪委員)

○SSC には月に数回、行っている。指導の最中、上の体育館から足音等が聞こえてきて選手が集中しづらく、さらに、測定器が増え、障害者の方の利用を促進するとなると施設の狭いと感じる。

○有資格者の指導者が増えてきているとあるが、指導者が指導できる場のマッチングを各市町村等と連携して早くできる仕組みの整理ができればよい。

○障害者のスポーツ参加について、全国のアンケートを見ても、普段家に居るので、スポーツをする・競技に行く体力に自信がないというアンケート結果が一番多い。リモートを活用する際に簡単な運動を行えるアイテムがあればよい。

○子育て支援も行っているが、母親から、親子で一緒に参加できる簡単なイベントがあれば行きたいという声をよく聞く。そういう場の設定もお願いしたい。

(事務局)

○SSC の施設の件は、利用者が増えてきている状況で、測定・サポートに必要な機器は揃えているが、機器を増やしたいという思いはある。場所の問題とスタッフの問題があり、今後の県立スポーツ施設の方向性を検討していく中で、SSC についても検討していく。

○また、有資格者については、研修会や講習会の場を利用して情報提供していくというこ

とを競技団体等とも相談してそのようなことができるのか進めていく。リモートの活用については、具体的な案がないので他県の事例も参考にしながら進めていく。

(戸梶委員)

○競技力の向上はスポーツのベースであり、競技人口の増加は重要。地域別のデータ、年齢階層別のデータ等を深掘りして調べ、そのデータに基づき地域課題に応じた具体的な施策や予算の配分を行っていただきたい。施策の方向性として「場の拡充」をしたときに、どの年齢層のスポーツ人口が増減したか見えづらいので「増やす」という観点からしてもそこを見せてほしい。「K P I」の次の「K G I」のゴールの部分を見せていただければすぐ参考になる。

(事務局)

○地域毎のニーズの調査をし、市町村毎の場の状況も把握しているところ。それらの調査によって、どういった場を拡充していくべきなのかをそれぞれの市町村の子どもの数や障害のある方の数を踏まえたK P Iをどのように設定していくのかを踏み込んでお示しができればと思う。

(須賀昌彦氏)

○高知龍馬空港で台湾との直行便を誘致したりしている。それには、ターゲットを絞ったプロモーション活動が必要と考える。来られる方に魅力を感じてもらうためには、現地に行って、スポーツツーリズムの何が高知県にできるのかという「見極め」を今年度から行った方がいいのではないと思う。各市町村向けに研修会を5回ほど行うという話があった。まだ最初の段階にあると思うので、方向性を出して行うこと。また、高知県内だけでなく、四国四県で各県の魅力を生かしたツーリズムを行うことも視野に入れて取り組まれてはと思う。

(事務局)

○台湾ではサイクリングが人気であり、サイクリストや自転車を使った周遊旅行を呼び込むため、来年度、四国4県が連携して台湾の自転車関連の展示会に出展することを検討している。また、県の国際観光課などとも連携をして、台湾に加えてターゲットを香港やアメリカにおき、プロモーション活動をしていきたいと考えている。

(尾下委員)

○本日の午前中に定例会の中で機器類の紹介と操作方法については動画で載せたいと考えている。また機器の横に利用される方がすぐに見れるようにQRコードを設置したいと考えている。

○強化策についてはSSCが春野総合運動公園の体育館の中にある施設なので、小アリーナ等を活用して対応できるように検討していきたいと考えている。

○スポーツに親しむきっかけづくりの中で春野総合運動公園で夏休みに、陸上競技をテーマに小学生の低学年と高学年に対して教室を開催した。陸上をあまりやっていない子供も遊びの中で陸上を学んでいく姿が見られたので続けていきたいと考えている。

○また、県民体育館と春野で行っている夏休みの水泳教室も人気なのでこちらも続けていきたいと考えている。

○武道については、競技人口が大きく減っている。以前は2日間開催していた大会が半日で終わるようになってきている。特に柔道の競技人口が大幅に減っている。柔道協会の会長との話では、ジュニアのきっかけづくりだけでなく、シニアやミドルの方たちにも武道を楽しんでいただくことをテーマにスポーツ教室の開催について話を進めている。

(遠藤裕幸氏)

○インバウンド旅行者の延べ宿泊者数がコロナ禍前を超えるなど、コロナ5類移行以来、観光業界の賑わいは顕著であり、観光とスポーツの相乗効果にも期待できる。

他方、コロナ禍を経た人手不足や物価高騰、オーバーツーリズムといった課題もある。オーバーツーリズムは、地域観光の推進、地域との協業が有効と言われている。

○余談だが、富山県射水市で耕作放棄地を利用したアグリスポーツの記事があったので紹介しておく。

(事務局)

○スポーツツーリズムの勉強会の場や宿泊業の方と話をする中で、オーバーツーリズムの課題を聞いている。県としては、持続可能なスポーツツーリズム、インバウンドの呼び込みを取り組んでいきたい。

○また、アグリスポーツにつきましては、今後研究をしてまいりたい。

(竹島委員)

○アスリート・指導者のキャリア支援について、やっと動きだしたと感じた。高校生・大学生に指導しているが、ジュニアの世代からスポーツを始めるわけで、若い指導者の指導の方が聞き受けられやすい。中学校の部活動の地域移行等もあるが、企業にバックアップいただいて大学卒業後、就職し高知県内の指導にあたることができればよい。こうしたシステムがきちんと構築されるよう、是非、この施策を進めて頂きたい。

(事務局)

○企業のみなさまにご協力いただかないと前に進まないの、県も努力していく。

(刈谷委員)

○県の行政施策としては、細部にわたって非常に役割のある施策がとられていると思われる。

○インバウンドに関して、円安は施策にとって追い風なのか、そうでないのか。また、施

策は王道なのか、それとも追い風だから行おうとしているのか。

○少子化、高齢化、地方という特性を持つ本県において、非常に難しい施策ではあると思うが、スポーツの在り方を含めて細部にわたって施策を進めてほしい。

(事務局)

○全国的に見て、円安はインバウンドの追い風になっているのではないと思う。今年度、地域の観光業者と協議をする中で、インバウンドを取り入れていきたい意向はあった。その一つの要因としては、一人当たりの旅行単価が高く長期滞在もしてくれるということ。併せてスポーツ庁においてもスポーツを通じたインバウンドの取組に力を入れていくといったところもあり、県も進めていきたいと考えている。

○社会の流れを捉えたスポーツ施策の取組について、重要な視点の意見をいただいたので、しっかり踏まえて対応していきたい。

(井奥委員)

○関心を示したのが、無料職業紹介所の開設の検討しているということで、私どもの職場で最近採用募集をしており、業務の一部には障害者スポーツセンターでの指導員的な業務というのが入っている。今年2人の高知県出身の大学生が面接に来て、子どものときにスポーツを経験し、たまたま同じような経歴で指導者への道を希望し、そういう専門の大学で専門のコースを専攻し、今回募集要項を確認すると障害者スポーツセンターで自分の経験を活かすことができるから来たと言っていた。そういう人は結構県内にいると思うし、無料職業紹介所もデジタルを徹底的に活用すれば可能だと思う。子ども障害者等でも有望なスポーツ選手が出てきてますので、ぜひデジタル技術を活用したデータベース等を通じて県での調整をよろしくお願いします。

(中平委員)

○稲見萌寧さんなどメダリストを何名か輩出している日本ウェルネススポーツ大学の理事長である柴岡さんとお話した。宿毛出身であり、スポーツの世界では人脈を持っており、この学校とも連携協定を結ぶことについて検討してみてもどうか。

知事結び

○子どものスポーツ環境づくり、あるいは競技力向上に共通して指導者の問題やデジタル化の問題、施設の問題様々な意見をいただきました。また、地域の活性化のことを述べると、インバウンド、スポーツツーリズムの振興、情報発信について意見をいただきました。本日いただきましたご意見を今後予算編成などを通じて、来年度に向けた県の施策に生かし、市町村の関係者や関係団体の皆様と県のスポーツ振興を進めてまいりたい。

3 閉会

以上

署名 青木章泰